

特集

沖縄うちな～から全国へ発信 「命どう宝」

今をいきる、明日をいきる、未来へいきるということ

「沖縄を(日本へ)返せ」の大合唱ではなく、「沖縄へ返せ」なのではないのか、民俗学者の谷川健一は、1972年の沖縄返還協定を前に呪文のごとく繰り返していたという。谷川の労作『沖縄 辺境の時間と空間』(1970)は、薩摩の琉球支配とそれに呼応する形で、琉球王朝もまた先島の地において、人頭税として搾取していたことを暴いてみせた本である。ニライカナイ(彼方にある神々の異界楽土)とマブイ(魂)を研究する谷川にしてみれば、国家とは民衆支配の抑圧装置としか写らないのであって、権力(者)は飽くなき手段によって差別支配の構造を巧妙につくり出すということを知り尽くしてもいた。谷川の認識には72年の沖縄返還は占領下の米国から日本国へと移管従属されたに過ぎず、強圧的国家権力の下に引き続き置かれてしまうという点において、何ら変わらないということだった。

したがって、沖縄の米軍基地問題は、薩摩による琉球「征伐」(1609年)から明治政府による「琉球処分」(1872年)以降なおも、変わりなき支配と従属という社会構造が地続きになっているというメッセージでもあった。

「沖縄のことは、沖縄が決める」という谷川の構えは沖縄独立論者のそれでもなく、沖縄に自主自立の自治権が最大限に保障されない限りは、沖縄独立運動の灯は北アイルランドのごとく決して消えるものではないという、ある意味ニヒリズムのような境地にあったかのようにおもわれる。

本年10月19日に沖縄県名護市の名桜大学多目的ホールにおいて、沖縄協同集會が開催された。米軍基地支配の続く戦後沖縄のアンチノミーの歴史を裁断する前泊博盛(沖縄国際大学・大学院教授)は、無知と無関心ほど恐いものはないと語った。辺野古問題を抱えながら沖縄北部地域全体を包含してヤンバルの森(大半が訓練場)の奪還と再生の視軸から、東アジア文化圏構想まで広げてみせた沖縄観光文化論者の平良朝敬(かりゆしグループCEO)、平良は日米同盟と基地に依存しない、基地は弊害あって一利もなしと断言して、基地なき沖縄へと果敢に立ち向かう発言だった。

最後の砦となってもここ辺野古からは一歩も引かないという稲嶺進(名護市長)の言もまた、悲痛な叫びを越えて確信に満ちていた。三氏ともども「私たち沖縄の地へ、沖縄を返してほしい」という雄叫びそのものであった。(第一部のパネルディスカッション「基地に依存しない市民主体のまちづくり、経済の展望」から。コーディネーター永戸祐三、日本労働者協同組合連合会理事長)

豪華キャストともいえる著名パネラーたちの言動は、すでに様々なところで全国報道されてはいたものの、その波及効果は、翌11月の沖縄知事選挙の結果となって現れた。沖縄知事選の応援には躊躇せず、出向かないではいられなかったという永戸祐三、その彼に依頼されて9月に社会連帯機構の招きで講演をした菅原文太もまた、死を賭しての沖縄知事選挙応援演説を行なっている。俳優から農民となって自由民権運動にもより添ってきた菅原文太は知事選の応援演説において、日本国のために沖縄があるのではなく、沖縄のために沖縄があると格調高く舌鋒したという。

今回の「沖縄協同集會開催の趣旨」(2014年10月19日)には、以下のようなことが書かれている。

「辺野古基地移設問題、自然環境問題で揺れる名護市から全国へ発信することは意義深く、未来の主役である子どもと若者の声とむきあい、本集会のテーマである『平和を尊び生命輝く未来へ』つ



なげ、豊かな自然や文化に恵まれた九州・沖縄の地で人や地域の自給持続可能性を掘り起して、東アジアに近い九州沖縄は国際的な団体とも協同、連帯し合い、協同の限りない力を余すことなく発信し、『協同を希望に、協同を未来へつなげ』新しい社会を創造する契機となる集会にしていきたいとの趣旨で開催の運びとなりました。」とある。

「平和を尊び生命輝く未来」をねがって沖縄へと菅原文太は突撃し、一週間後に玉砕するかのよう

に散ってしまった彼の心境もまた、その趣旨と同じ思いだったようだ。

第2部パネルディスカッションは、「～今をいきる、明日をいきる、未来をいきるということ～」というタイトルではじまっている。

伊佐真次（「ヘリパッドはいらない」住民の会）と大橋文之（福島避難者のつどい沖縄じゃんがら会）と花井正光（沖縄エコツーリズム推進協議会）の三氏が登場している。伊佐真次は、「沖縄やんばるの森」東村の高江地区に住む人々とともに、生活をかけた非暴力主義ヘリパッド反対の闘いを組織している。福島から沖縄へと逃れて来ざるを得なかった「福島棄民」大橋らの望郷への寄せる思いは、放射能汚染賠償をめぐる沖縄からの闘いともなっている。世界的な自然保護運動を意識しながら、島嶼琉球弧を世界遺産にという願いを込めた花井たちの生物多様性めぐる運動も提起された。三氏それぞれの関心のベクトルは、それぞれ別々のところに向き合っているかのようでありながら、じつは通底しているところは全く同じ立ち位置にあって共振する。

沖縄協同集会は、さらに第3部第4部とリレートーク、パネルディスカッションへと長丁場がつづいた。（時間と紙幅制限により、ここは私の文責でまとめた）

フォーラム当日、名桜大学の会場に来ていた組原洋（沖縄大学名誉教授）に感想をもらった。名護での感想は「沖縄協同集会在が提起したものは何か ～「協同」の原点をさぐるフィールドワーク～」という小論に発展し、世界各地を歩きまわった組原の協同性の世界を見いだす秀逸な「見聞録」がタイミングよく本誌に届いた。

ところで、今年度はワーカーズコープ事業本部ごとに自主的に協同集会在が取り組まれていた。北海道事業本部だけでも苫小牧、手稲、恵庭、札幌などで、すでに4回も開催されている。その総決算となる11月には、福岡博多の地において21分科会にもおよぶ九州沖縄協同集会在が開催された。二日目には21ある各分科会場で配布された参考資料は膨大な量となって蓄積されて、すでにデジタル化されているが、本誌来年2月号には、各分科会のまとめの方を掲載する予定になっている。そのメインプログラムも意識しながら沖縄協同集会在特集を読破していただきたい。

（上平泰博）